

# 秋草学園短期大学

## 第15回

### 現職保育者研修会

#### 講演要旨報告書

#### 講演1

「教育・保育現場と養成校との連携強化の可能性

～より高い専門性を目指して～

講師 富山 大士

(本学幼児教育学科准教授)

#### 講演2

「もっと気軽に音体験 ～保育者自身の（音楽）の幅を広げるために～」

講師 二藤 宏美

(本学地域保育学科非常勤講師)

開催日時：平成30年2月17日

開催場所：秋草学園短期大学視聴覚教室

# 「教育・保育現場と養成校との連携強化の可能性 ～より高い専門性を目指して～」講演要旨

富山 大士

## 要旨

養成校では、各校のカリキュラムポリシーに則った講義科目・演習科目等を通じて学生教育を行い、ディプロマポリシーに則って学位を授与し、幼稚園教諭・保育士として、保育現場に送り出しています。

一方、保育現場ではキャリアパスを構築し、各園・保育者個人の状況に応じて園内研修や外部研修等のさまざまな研修が実施されています。2017年度に入ってから、保育士等の処遇改善と連動して、キャリアアップに係る研修を受講する動きも出ています。

現在、教育実習・保育実習やインターンシップ等に関しては両者の連携が積極的になされています。本講座では、より高い専門性を有する幼稚園教諭・保育士の養成・育成を目指して、養成校と保育現場のさらなる連携強化について考えます。養成校と保育現場が一層の連携を図る上で、それぞれにどのようなことができるのか、その連携実践例等を通して考えていきます。

## 講演概要

### 1. 教育・保育現場と保育者養成校の現状

現在の日本では、国全体としては少子化が進んだ人口減少社会です。しかし、労働力となるような若年層の家庭が交通の便の良い都市部に集中して居住しているため、都市部では保育所への入所希望家庭の子どもが入所できない状態（いわゆる「待機児童」の発生している状態）になっている一方で、地方から都市部へ若年層が流出するために、地方では保育施設の統廃合が一層加速する状態となっています。

都市部の保育所への入所可能児童数を相当数増やしても、入所希望のニーズの増加に追いつかず、根本的な待機児童問題の解決には結びついていない現状となっています。

国は、2015年に子ども・子育て支援新制度<sup>1)</sup>を開始し、「『量』と『質』の両面から子育てを社会全体で支える」方針を打ち出しました。待機児童問題を解消するためには「量」の拡充が必要ですが、それだけではなく、子どもたちがより豊かに育っていける環境を整備するために「質」の向上も目指しています。

また、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以

下「3法令」と呼びます)が2017年に新たな内容に改訂となり、同時に告示されました。幼児期に育みたい資質・能力の3つの柱として、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を打ち出し、小学校以上の学習指導要領において育成を目指す資質・能力の3つの柱である「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」につながっていきます。

このような背景の下で、教育・保育現場および保育者養成校の現状は以下のようになっています。

### **(1) 教育・保育現場の現状**

子ども・子育て支援新制度の発足により、都市部での「量」の拡充が加速されました。しかし、保育所入所希望者の増加により、保育所を増やしてもなかなか待機児童問題は解決せず、保育所を増やし続ける状態になっている自治体もあります。結果として、保育所を増やしても、実際に保育をする保育士が不足しているために、当初予定していた児童数の保育ができない状態も生じています。つまり、保育士・幼稚園教諭の確保をどうするか、という問題が生じています。

保育士不足の要因の一つとして、平均的な給与水準が他業種よりも低いことが挙げられています。国は、「保育所等におけるキャリアパスの構築」を前提条件として、保育者の処遇改善を高い水準に保つ制度を創設しました。また、全国で開催される「保育士等キャリアアップ研修」<sup>2)</sup>の受講を前提として、中堅以上の経験ある質の高い保育者の処遇改善の金額を高い水準に保つ制度も創設しました。それらの仕組みを踏まえた職員育成計画を立てることが重要となっています。

また、3法令が2017年3月に告示されましたが、これらはいずれも2018年4月施行となっています。つまり、2018年2月となった現在においては、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園等の職員として3法令の理解を深め、3法令に沿った「全体的な計画」「指導計画」を構築していくことが急務となっています。

### **(2) 保育者養成校の現状**

18歳人口の減少により、大学・短期大学等の高等教育機関への入学者数が減少傾向にあります。また、都会の大学を目指す若者が増加することで地方の活力が低下することから、都内区部の大学の定員増加はさせないようにしようとする動きもあります。保育者養成をする大学・短期大学等の入学者が減少すれば、卒業とともに保育士資格・幼稚園教諭免許を取得する新卒学生数も減少し、保育士・幼稚園教諭の確保をどうするかという問題を抱えている保育現場に有資格者を送り出すことが難しくなってきます。

保育者の処遇改善のための「保育所等におけるキャリアパスの構築」においては、保育所等の運営全体に関わる組織論が必須となります。保育の質の向上に関わる研究者等を交えて各園が作成することが望まれます。また、「保育士等キャリアアップ研修」の実施に関しては、各分野での専門家である大学教員等の積極的な関わりが大切となってきます。

大学等も組織的な運営が求められています。3つのポリシーとして各大学等が提示する「アドミッションポリシー（入学者受け入れ）」「カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施）」「ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与）」に沿い、学生の入学から卒業までの全体がより一貫し、各大学等の特色が見えやすいような課程を構築していく必要があります。

さらに、3法令の改訂に関しては、養成校における学生への授業での解説のみならず、施行を目前にした保育現場に対して、保育実践と3法令の理解を結びつけるような研修等を通して、保育者のより深い理解につながるよう、積極的に関わっていくことが望まれます。

また、3法令の改訂に沿った幼稚園教諭養成課程（文部科学省）・保育士養成課程（厚生労働省）に則した養成課程を構築していく必要があります。これは、2019年度入学生からの施行となります。

## 2. 教育・保育現場と保育者養成校の連携の意義について

教育・保育現場にとって、保育者養成校は新卒の保育士・幼稚園教諭が養成される重要な機関となります。しかしそれは保育者養成校にとっても同様であり、保育士・幼稚園教諭として養成した学生たちの就職先となります。

しかし、保育士資格・幼稚園教諭免許を取得するためには実習単位を取得する必要があります。幼稚園・保育所等の教育・保育現場と保育者養成校とのつながりは、すでに実習時から始まっていると言えるでしょう。

さらに、実習以前に行うインターンシップやボランティア等の関わりまでを考えると、保育者養成校への入学当初から、教育・保育現場をイメージしていくことが大切と言えることでしょう。

以上の話題は、保育者養成校の学生時代から教育・保育現場への就職までの流れについてのものですが、私自身は、それだけでは教育・保育現場と保育者養成校のつながりとしてはもったいないような気がしてなりません。インターンシップ・実習等の在学中（保育者養成期）の関わりを経て、教育・保育現場に就職してから後（保育者育成期）も、教育・保育現場では、新任保育者としての育成や、その後の保育者の専門性向上に向けた層別研

修等々の各種研修を行います。ここに養成校教員が積極的に関わり、園内の職員と異なる視点での考え方等を議論したりすることが重要であると思います。

保育者養成期から保育者育成期の移行については、「バトン渡し」ではなく「協働」でありたいと私は考えています。保育者として養成した後、現場にバトンを渡してしまえば養成校教員の仕事は終わりとするのではなく、教育・保育現場と養成校で力を合わせて、一緒に保育界を盛り立てていくことができれば理想的だと常々考えています。

### **3. 教育・保育現場と保育者養成校との連携の例**

#### **(1) 保育者養成段階**

保育系の学生は、たいてい、「子どもに関わることが好き」「自分が幼かった頃に優しく関わってくれた幼稚園の先生のようにになりたい」というような純粋な動機から入学を希望することが多いです。入学後早期からの保育現場の体験を通して、入学早々から、学生の保育への期待をつないでいくことで学生のモチベーションを保つことが大切であると考えています。また、保育現場を見学することにより、座学だけでは得られない実体験として、保育の環境を実際に理解できるよい経験となります。

保育現場の先生方を大学等に招いて、ゲストスピーカーとして講演していただくことも学生にとっては新鮮な経験となります。現場で「今」を過ごす先生方の声は、学生にとって生き生きとした新鮮な声としてインプットされます。

インターンシップ等の現場経験は、実習に向けての準備的な面で有効です。

教育実習・保育実習を行う際には、養成校と教育・保育現場とのコンセンサスが大切となります。学生が「何を」「どのように」現場で学ぶのか、ということ、事前指導、実習の段階、実習日誌や指導案の作成、実習事後指導の在り方をよく議論しておくことが大切となります。

実習受け入れを行う保育現場側の実習担当者の専門性を高める手段として、実習指導者養成を行うことの大切さも議論されています。

#### **(2) 保育者育成段階・施設運営等**

保育者養成校の卒業年次に就職活動をして、採用内定を受け取った後、教育・保育現場によっては、入職前研修を在学中に行う場合もあります。この段階の教育を「新任教育」として保育現場に完全に任せてしまうのではなく、養成校側としてもどのような入職前研修が効果的であるのかについて議論に加わっていくことも今後大切になると私は考えています。

保育現場への就職後の新任保育者研修では、社会人としての礼儀・マナーや、保育者としての常識、保護者対応等々を学ぶこともあるでしょう。職場文化のちがいもあるのは事実ですが、この段階でどのような学びが必要であるかを現場と養成校の双方で話し合っていくことも大切であろうと思います。

中堅保育者研修や管理職研修も保育現場では行われていることでしょう。改訂された3法令の施行を目前にして、3法令の内容と保育の計画・保育内容を関係付ける研修において、普段からその子どもたちの保育に関わっている保育現場の先生のみならず、第三者的な養成校教員も耳にしつつ、共に研修に参加することは、保育現場と養成校教員の双方にとっても有益だと思えます。

「一生現場で働いていたい」「管理職って大変そう」という意識を強くもつ保育者がいる場合、管理職をどう育成していくのかは、まさに組織マネジメントそのものです。次の世代にその保育施設の運営を誰が行っていくのか、各保育施設はよく考えておくことが必要だと思えます。職員が意識を変え、チームワークの大切さを理解するような研修を行うことに関して、養成校教員も力になれると思います。

#### 4. まとめ

教育・保育現場と保育者養成校との連携の意義を議論し、具体的な連携の展開例について講演しました。元現職保育者経験者、臨床心理士、管理栄養士等も養成校教員として保育者養成に関わっています。ぜひ教育・保育現場の先生方と保育者養成校とで連携を強化して力を合わせ、一緒に保育界を盛り立てていければと切に願っています。

#### 【参考文献】

- 1) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『子ども・子育て支援新制度 なるほど BOOK』（平成28年4月改訂版）  
[http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/event/publicity/pdf/naruhodo\\_book\\_2804/a4\\_cover.pdf](http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/event/publicity/pdf/naruhodo_book_2804/a4_cover.pdf)
- 2) 厚生労働省通知「保育士等キャリアアップ研修の実施について」（雇児保発 0401 第1号 平成29年）

## 「もっと気軽に音体験 ～音楽の幅を広げよう～」 講演要旨

二藤宏美

### 要旨

歌い、身体を動かし、リズムを奏でる一音楽表現活動は、幼児にとって大変重要、かつ楽しいものですが、一方で、指導者・子どもともに、得意不得意、好き嫌いの個人差も大きいかも知れません。また、皆で奏でる音楽が、現場では必ずしも音響的に美しくはならない現実がままあることも、悩ましいものです。

もっと気軽に簡単に音と遊ぶための考え方と具体的なプログラム、そして音の魅力へ愛情をもって気持ちを向けるための環境作り、楽器や音具の扱い、現代音楽等から得られる素材について、実習します。音という抽象度が高いモノ・コトからともに想像・発見し、より自由に表現する子どもの活動を支えるためのきっかけになれば幸いです。（「1m程度のひも1本」「音の鳴るもの1つ（持ち歩けるサイズ）」を各自持参し使います。）

### 講演概要

#### 1) ウォーミングアップ

ストレッチ、深呼吸して一斉に声を出します。その声をモニターして、より美しい声、より好ましい声を出してみましょう。おそらく、各自あまり大きな声にはならないと思います。次に、講師と同じ高さで声を出します。これはピッチマッチといい、生後数か月の赤ちゃんからできる遊びです（Kessen et al, 1979, Nito et al., 1998）。具体的には機嫌よく声を出している乳児の声をとらえてまず真似をし、次に乳児が何となくそれに応答するようなタイミングで声を出すので、同じようにいちいち真似ます。今度は大人側がレ、ファ、ラのいずれかの高さで「アー」と長めに声を出してみると、かなり高い割合で乳児は応答し、しかもその声の高さは、大人が示した高さと一致することが観察されます。声を出して歌うことは大人にとって少々ハードルが高いものですが、こうした簡単な音声のやりとりは最も初期の歌遊びとなります。是非試してみてください。

次に、講師が示した音に対して、音程を保って声を出しましょう。完全5度音程で出してみてください。最初はピアノの音を頼りに音を探しましょう。難しいですが、5度音程で「ハモる」ことは、最古の聖歌であるグレゴリオ聖歌が一斉唱から二重唱になった千年以上前から協和性の高い美しい音程として使われたものです。さらにアフリカやヨーロッパ等の民族音楽でも観察されます。

#### 2) 簡単な音の組み合わせで歌や音楽を豊かに

さて、この5度音程を使って、簡単な伴奏付けができます。歌やメロディの大事な音は主音等とよばれる核音です。アイリッシュパイプ（アイルランドの伝統的なバグパイプの一種）の民族音楽では、レの音の通奏低音が入っています。これはドローン（持続音）とかオスティナート（執拗な音型の繰り返し）と呼ばれ、同じ音やリズムを全曲とおして持続あるいは繰り返すことで伴奏される形になっています。このアイデアを伴奏付けに利用してみましょう。「犬のおまわりさん」はハ長調ですが、主音のドと5度上のソを適当なリズムで全曲を通して繰り返すことで、伴奏ができます（実演）。ここでドミソの和音ではなく、ミ（第3音）をぬくことがコツです。5度音程の内部に音を配置しないことにより、「ドミソ」「ドミソ」「ドレソ」「ドファソ」等の主和音のみならずそれ以外の機能をもつ和音を最大公約数的に含ませることができ、ほとんどのメロディの変化に対応できます。たとえばずっとドミソを弾き続けると、必ず不協和な部分が生じてしまいます。凝った伴奏ができない状況や、それぞれ鍵盤を別の子どもに分担させる状況などに応じ、幼児も保育者も、もっと簡単に歌と鍵盤楽器とのアンサンブルができるのです。色々な歌で試してみてください。

次に、音程のない「ことばのリズム」でオスティナート合唱をやってみましょう。「おちやらか」「せっせせのよいよいよい」などの歌にあわせて4拍リズムなら何でも良いので、何らかの言葉をとなえるグループを加えると、簡単で面白い合唱になります。ことばは、撥音や促音、長音を含めるとリズムカルで面白いと思います。「アップルジュース」「こまっちゃったね」等、子どもたちにアイデアを出してもらおうとよいですし、新しい面白い単語を考案してもよいですね。

次に、もう一つの簡単な音の組み合わせとして、時間位相の変化に挑戦しましょう。（CDディアンジェロより）このコンテンポラリーなブラックミュージックでは、ドラムとベースが細かく同時にビートを刻んでいるのですが、サビ部分では互いにリズム音痴のごくわずかにビートがずれます。聴いていると一瞬違和感や浮遊感がありますが、そのあと戻り、再びサビで同様の状態になります。いわゆる「グループ」の一種ですが、ポピュラー音楽のみならず、民族音楽でもよく観察されます。ここでは簡単に遊べるごくかんたんな位相のずれとして、「カノン」を「ほたる」（2拍ずらし）や「クラッピング・ミュージック」（1拍ずらしを12周して一巡）で実験してみましょう。

### 3) 耳を鍛えよう

次に、音を聴いたり出したりするのではなく、「音を思い出す」ことをやってみます。皆さん、朝起きてから、最初に聴いた音、一番きれいだった音は何ですか？紙に書き出してみましょう。次にそれを周りの仲間と交換すると、さまざまな発見があります。また、声



でまね、皆で環境について話し合ってみてもよいですね。何がきれいなのか、なぜそう感じるか、音について話し合うことは、音への感受性を鍛えます。すぐに思いつかなかった人は、是非本日の帰り道で探してみてください。「耳を鍛える」ためには、歌ったり音楽を聴いたりする以外にも身近なさまざまな方法があるのです。皆さんも子どもたちも、音への注目が変わると思います。そうすると、歌い楽器を鳴らす時に、どんな音を出そうか考えをめぐらせることができるようになるでしょう。たとえば、水道の蛇口でいたずらをしている子どもに、どんなふうに声をかけましょうか。

今度は二人ペアになって、オノマトペの交換ゲームをしてみます。広い会場を使ってペアがバラバラになり、自分が発話すると決めた短い言葉を一齐に繰り返しながら歩き、ペアの相手に出会ったら注意深くペア同士で言葉を交換し、反対側のゴールまで移動します。言葉の交換がうまくいったら、持参した音の出るものでリズムを演奏し、交換しても良いですし、音具を交換しても良いですね。今回は全員で動いてみましたが、音をただ聴いているだけのグループを作り交代していくと、音の渦の動きが大変よく感じられます。

その他、割愛しましたが、「音をたてずに立つ、座る」つまり静寂を皆で作りますゲームも興味深いので試してみてください。とても難しいですが、子どもたちと行くと驚くほど集中します。

#### 4) 音が出るものとひもを使って

今日は音が出るものを持ってきたので、これを使って、いくつかのことを試しましょう。

まず、持ってきた物の音や形状を見せ合って説明します。実は何を持ってくるかを考えるところから、このアクティビティは始まっています。「家の中にあるもの」「園の室内にあるもの」「園庭や公園にあるもの」と限定してもよいですが、まず音が鳴るものを探索したり時には作ったりすることになります。大人と子どもとで、考えたり探したり工夫したりする時間が持てますね。一人ずつ音を出し、皆に紹介しあうことも次の段階の重要な遊びになります。どんなふうに鳴らすか、工夫や集中が必要ですし、持ち主ならではの個性的な演奏がなされるでしょう。そのときに、名前をつけて紹介すると良いです。形や音から命名されるかも知れません。たとえばインドネシアのゴングという楽器は「ゴーン」という音がするからそのような名称で呼ばれます。国を問わず、楽器には魂がこもっていると考えられ、宗教儀式で用いられることも多いです。名前をつけると、さらに唯一無二のものになり、愛着も湧きますし、擬人化できるようになります。

講師はリボンでフォークを3個位吊るしてみました。揺らすと音がしますので、聴いてください。美しいと思う人、何人いますか？実はこれは耳をひもに当てて聴くのがポイントです。とても神秘的で美しい音がします（会場で遠くから聴くと決してきれいな音では

ありません)。タコ糸を用いるともっと違う音がするので、試してみてください。

会場の皆で一斉に音を鳴らしてみ、似た音をみつけて集まったり、今度は一番違う音同士で集まったりしてみます。次に、音量、音高の順にならべ、一番大きい音、澄んだ音、高い音、太い音など探してみましよう。かなり耳が鍛えられます。

集団の中で一番高い音と低い音をみつけたら、今度はその持ち主2名に、音を鳴らしながら部屋を動き回ってもらいます。その間、残りの全員は目をとじて、音の移動を指で追ってみましよう。少し難しくして、似た音のするものを2つ、或いは3つ使って同じことをやってみます。目を開けている普段は、自分の前方にある音により注目がいきますが、自分の後ろや上を音が回り込んで移動するのが感じられると思います。

ものがたりを考えて、ひもをつなげて色々な音がするおとのみちを作ったり、音の国を作ったりすることができますね。今回は、旅人グループと街グループに分かれ、旅人は寒くて風が吹く山間から街へ旅立つことにします。途中でどんな音がするか、想像して鳴らすとよいですね。暖かい下界の街では、村人たちが、美味しい食事を作ったりおしゃべりをしたりにぎやかです。どんな音が聞こえているのでしょうか。旅人が街に着いたら、互いに音をならして挨拶をして、街の人々はおもてなしをしてください。

#### 5) 最後に

これからの世界を生きる人たちにとって重要なことは、知識を行使する力であるといえます。大人になってから人生のあらゆる局面で重要になってくる創意工夫を、最もゆったりとした時間の中で、失敗もたくさんしながらあれこれ試せるのが、初期の集団保育の場であることに、その重要性和喜びと期待を是非感じてください。ご紹介した中のいくつか、園の大人や子どもの遊びをより豊かにするきっかけになれば幸いです。

#### 【参考音源】

マリー・シェーファー「ミニワンカ」 オノマトペとことばによる水の一生を表現した合唱

ディアンジェロ「ブラックメシア」より リズムのグループを作りだすビートの「ずれ」

アイリッシュパイプ曲集より 持続音を伴う演奏

スティーブ・ライヒ「ドラミング」「クラッピング・ミュージック」「ピアノ・フェイス」等

#### 【参考図書】

マリー・シェーファー「音さがしの本」春秋社 サウンドスケープの理念に基づくさまざまな音探索遊びが紹介されている。

【参考文献】

Kessen W. et al., (1979). The Imitation of Pitch in Infants. *Infant Behavior and Development*,2, 93-99.

Nito H. et al. (1998). Vocal Pitch- Matching in Infants. *Proceedings of the 8th International Seminar of the Early Childhood Commission of the International Society for Music Education ECME*.